↓上品かつ優しさにあふれた上野焼、あたたか味のある器が人と人との距離をいっそう近づかせます。

国際交流の協定締結

泗川市児童との日韓交流再び

上野焼開祖・尊楷ゆかりの地である韓国泗川市との交流再会が決定しました。2002年の上野焼400年祭を期に続いた児童の相互訪問が、昨年は国際事情の悪化等で中断。しかし、本年度からは同市内の東城初等学校に交流先を移すことで継続可能となり、4月28日に同校で協定書が交わされました。本町からの訪韓は10月9日からの3日間を予定しています。

↑東城初等学校で交わした協定、金校長と町長代理の辻村課長㊨が笑顔で握手。

↓激しい競り合いに会場中の視線が注がれた、方城中3年生の学級対抗リレー。

町内3中学校で体育会

各校のグラウンドで心ひとつに

町内の3中学校で5月24日に体育会が開催され、計727人の生徒が同じ空の下で汗を流しました（赤池中261人・金田中257人・方城中209人）。それぞれの学校が独自の種目を含む約20のプログラムに全力で取り組み、この日を目標に重ねた練習や深めた絆の成果を十分に発揮。各校のグラウンドは、生徒と教師、保護者との一体感に包まれていました。

第36回 上野焼春の陶器まつり

陶の美と伝統に触れた3日間

一年で陶の里が最もにぎわいをみせる「春の陶器まつり」が4月24日からの3日間、上野焼協同組合の16窯元と上野の里ふれあい交流会館で開かれました。期間中の1日は雨に見舞われましたが、ETCの高速料金値下げ効果もあり、県外ナンバーも多くみられました。会館内で開かれたギャラリー陶（コヅ）での「母の日の食卓展」やふれあい市の「農産物大売り出し」も大好評。訪れたおよそ1万人の陶芸ファンは、福袋や掘り出し物をはじめ、お気に入りの器を手に、ツツジと新緑が彩る春の上野路を楽しみました。

南木菅原神社の神幸祭

天神様ゆかりの輝く神紋を胸に

南木菅原神社の神幸祭が5月2日から2日間行われました。境内と御旅所（おたびしょ）では19人の稚児が勇壮な獅子とともに舞を奉納。5歳～15歳の地元の子どもたちが輪になり、中央の太鼓を順に打ち鳴らしながら、農繁期に向けて豊作を祈願しました。120年以上の歴史がある伝統行事とあって、道真（みちざね）公にちなんだ梅の神紋を胸に、愛らしい稚児たちも誇らしげでした。

↑奏楽にあわせて太鼓を打つ稚児。歴史深い伝統行事に、その表情も真剣です。

↓行道の後、供養の読経と尺八の献笛が行われ、藤に御神酒がそそがれました。

定禅寺の藤祭り

樹齢5百年超の藤の長寿を願って

県指定天然記念物「迎接（こうじょう）の藤（ふじ）」が甘い香りを漂わせる中、恒例の「藤祭り」が4月29日に定禅寺（弁城）で開かれました。今年は例年より1週間ほど開花が早かったため、当日の状況が心配されましたが、直前の冷え込みで満開の中での挙行となりました。およそ10万本の花房がゆれる藤棚の下で、厳かに響く読経（どきょう）や尺八の献笛（けんてき）を約100人が静かに見守りました。

興国寺の花まつり

甘茶で無病息災願う伝統行事

興国寺（上野）の「花まつり」が、5月8日に行われました。お釈迦様の誕生を祝うこの催しは、通称「甘茶」と呼ばれ、その昔、地元で学校が休みになったほどのイベントです。境内には花の御堂が設置され、幅広い年代の人が無病息災を願い、生まれたばかりの釈迦の像におしゃくで甘茶をかけました。今もなお地元の人に守られ、続いている伝統行事です。

↑上野保育所の年中・年長組の園児40人も、お釈迦様に優しく甘茶をかけました。

↓オスのノドが赤いのが特徴のノゴマ、チョロロなどと高く澄んだ声でさえずる。

財津政義さんがノゴマの撮影に成功

町内で小さな珍鳥発見

町内で「珍鳥の撮影に成功した」というニュースが飛び込んできました。財津政義さん（伊方）宅の庭に突然姿を現したノゴマ（ツグミ科）。日本では夏鳥として北海道で繁殖しますが、九州でその姿を見るのは極めてマレです。文化財専門委員で動植物に詳しい財津さんだからこそ成功した貴重な一枚。全長15㎝ほどのカワイイ珍客が写真に収まりました。